

TJFの事業

高等学校中国語教員研修

——現場のニーズに合った研修を考える

研修実現にいたるまで

「外部からの刺激がないと、自身の語学力を磨こうとする意欲もなくなってしまうので、語学力をつける研修や情報交換のできる機会がほしい」。TJFが94年に実施した高校中国語教育に関するアンケート調査で、多くの教員が研修の機会不足を訴えていました。当時から中国の大学が主催する中国語教員研修はありましたが、期間(学期中に始まる)や費用の点から、日本の高校教員は参加が難しい状況にありました。教員研修は懸案事項のまま月日が流れていきました。

2002年8月、日中の機関の協力を得て、高等学校中国語教育研究会が黒龍江省ハルビン市で「高等学校中国語教員研修」を開催しました。日本の高校中国語教員を対象とした初めての研修に、TJFは運営事務局として、カリキュラム作成などに全面的に協力しました。研修の実現は大きな一歩ではありましたが、中国側から派遣される講師が決まったのが開催2週間前とあって、講師との事前の十分な打ち合わせができず、内容面では課題が残りました。

第2回研修に向けて準備を始めようとしていた2002年12月、中国教育部副部長と文部科学省事務次官との協議が行われ、第二次日中教育交流計画の一環として、教育部と文科省の主催で高校中国語教員の短期中国研修を実施することが決定しました。TJFは、上記研修会での実績があったことから、協力団体としてカリキュラムや事前研修の企画など、内容面でこの研修事業に関わることになりました。

SARSにより延期となり、2004年が第1回となった研修は、全日程23日間のうち、前半18日間は吉林大学で講義を中心に、後半5日間は北京で見学を中心に実施し、20名の高校中国語教員が参加しました。

準備段階で心がけたこと

TJFは、日本のとりわけ高等学校における中国語教育の現状に沿った研修にするために、講義内容に関する詳細な原案は日本側で作成したほうがよいと考え、カリキュラム作成委員会を立ち上げました。高校中国語教員と大学関係者によって構成された作成委員会は、英語など他の外国語の研修や、中国語教員免許取得のための集中講座の内容等を参考にしながら、詳細な講義内容にまで踏み込んで、カリキュラムの原案を作成しました。午前中は講義型、午後は口を動かす授業、前半は知

識吸収型、後半は参加型と講義の配分にも気を配りました。こうして出来上がった原案を研修実施機関である吉林大学とともに検討を重ねた結果、日本側の要望がほぼそのまま受け入れられるかたちで、研修内容が決まりました(右ページ研修内容参照)。

また、講師に少しでも日本の高校で中国語教育を担当する現場の要望を把握してもらうために、主任講師を日本に招聘し、中国語の授業を参観してもらったり、教師の集まりに参加してもらい、できるだけ多くの中国語教員や中国語を学んでいる高校生たちと話をしてもらいました。

今回の研修の成果

研修の目的のひとつである教員の中国語力向上については、「自分の発音に自信がもてるようになった」「高度なコミュニケーションの練習ができた」などと、参加者は研修の成果を評価しています。また、講義以外の時間を利用して、長春や北京の街に出かけ、中国の人々と交流したことも、教員自身の中国理解を深めたようでした。外国語としての中国語の教授法習得という目的については、講師が日本の高校における中国語の授業が十分イメージできていないこともあって、課題を残すことになりました。

当初は期待していなかったことですが、23日にわたって寝食をともにしたことで、研修参加者の間に強い連帯感が生まれたことは、大きな成果でした。研修前は事務的連絡に使われていただけのメーリングリストでしたが、帰国後は中国語の授業に関する相談メールなどが行きかうようになりました。

今後に向けて

今回の研修であらためて感じたことは、高校中国語教育現場の多様性でした。参加した教員は、中国語専攻者もいれば非専攻者もあり、中国留学や在住経験のある者もいればない者もあり、また中国語学習年数や教学経験年数もさまざまでした。また、所属校の中国語教育の現状も、履修単位数、履修形態、1クラスの学習者数、学習目標がそれぞれ違っていました。当然、研修の内容に対する要求も異なってきます。

こうした現状を踏まえ、研修内容をさらに充実させるために、第1回の参加者の評価をもとにカリキュラムを見直す作業がすでに始まっています。講師に日本の教育現場のニーズを把握したうえで講義内容を考えてもらうため、講師を順次日本に招聘

することや、研修会用の教材を作成することも計画しています。

また、5年計画で実施予定のこの研修の対象は、教諭と常勤講師となっていますが、400名以上いると考えられている中国語担当教員のうち、この条件に当てはまる教員は約100名しかいません。たとえ参加資格があったとしても、3週間以上家を留守にすることが難しいという教員もいます。

中国側からは、第2回は参加人数を増やす用意があるとい

う、ありがたい申し出もいただき、文部科学省や駐日本中国大使館教育処と協議した結果、できるだけ多くの現職教員が参加できるように、中国での研修内容を充実させるとともに、国内でも研修を実施し研修規模を拡大することにし、すでに日本の大学への働きかけも開始しました。

長年の懸案であった教員研修という課題の解決策が見つかり、また一つ肩の荷が下りたように思います。

平成16年度高等学校中国語担当教員研修

- 主催： 中華人民共和国教育部、文部科学省
- 実施： 中華人民共和国国家対外漢語教学領導小組弁公室
- 協力： 財団法人 国際文化フォーラム
- 期間： 2004年7月25日(日)～8月16日(月)
- 会場： 吉林大学(中華人民共和国吉林省長春市)
- 講師： 吉林大学国際交流学院所属の中国語教育専門家8名
吉林大学大学院生8名(助手)
- 研修生： 14都道府県より高校中国語教員20名

吉林大学での研修内容(1コマ90分)

中国語の基礎知識(2コマ)：3週間の講義を受講するために必要な音声と文字と表記(ピンインの体系)などに関する基礎知識を学ぶ。

発音矯正(0.5コマ×8回)：マンツーマンでの指導を含め、発音を徹底的に矯正する。

ディベート(0.5コマ×8回)：与えられたテーマに従いディベートを行うことにより会話力を向上させる。

文法指導(1コマ×2回、2コマ×1回)：基本的な文法項目の概論と日本人が間違えやすい文法項目の教え方を学ぶ。

コミュニケーション表現(1コマ×3回)：高校生同士の交流において予想される場面(物を贈る、食事に招待するなど)でよく使われる表現とその教え方を学ぶ。

作文指導(1コマ×1回、2コマ×1回)：作文の書き方全般についての講義を受けた後、課題に基づき作文を提出。代表例のいくつかを添削しながら、間違えやすい表現を学ぶ。

教室活動(2コマ×3回)：

- 第1回：研修生が実施している中国語の授業について発表する。
- 第2回：教室活動で使える教材・素材を収集する。
- 第3回：それぞれが採った教材・素材の使い方を発表し、講師のアドバイスを受ける。

発音指導(1コマ)：日本語話者の指導で注意すべきことに重点を置いた発音の指導法の概論を学ぶ。

視聴覚授業の指導(1コマ)：視聴覚授業で使用する教材の選び方と授業での使い方を具体的な例をあげて紹介する。

授業見学(2コマ×2回)：研修期間中に行われている日本と韓国の大学生を対象とした授業を見学する。

中国語新語概況(1コマ)：新聞や雑誌の記事をベースに、新しい単語、新しい表現を紹介する。また、日本で使われている教材にでてくる語彙・表現の中で、現在は使われていない、あるいは使う頻度が少なくなっているものを紹介する。

文化活動(2コマ)：中国の伝統文化である京劇について講義を受ける(北京研修時に実際に京劇を鑑賞)。

教案作成(2コマ)：研修生が所属する学校の中国語の履修単位数に従って、四つのグループに分け、グループごとに教案を作成し、それをもとに20分間の模擬授業を行ったうえで講師のアドバイスを受ける。

伝統的中国と新しい中国(1コマ)：中国の伝統的な行事や風俗、食文化を学ぶとともに中国の新しい動きについて学ぶ。

中国語の新しい教材の紹介(1コマ)：教科書、ビデオ、VCD、コンピュータソフトなど外国語としての中国語教育用の最新の教材・素材とその使い方を紹介する。

交流で役立つ中国語(2コマ)：中国代表団が学校を訪れたことを想定して、正式な挨拶、校長と代表団の懇談などの場面で使われる表現を学ぶ。

朗読発表(1コマ)：発音矯正の成果を披露することを目的に、初日に与えられた課題文を全員の前で朗読する。

※講義以外のプログラムとして、長春市内の中学・高校の日本語教師との半日交流を実施する。4泊5日の北京研修では、盧溝橋の「抗日戦争記念館」や周口店などの名所・旧跡を見学するとともに、中国語の授業に役立つ教材購入のための書店めぐりなどを行う。



①開講式で挨拶する研修生代表。②宿舎は2人1部屋。ベッドの上で予習、復習。③ディベートでは小学校での英語教育の是非、制服の是非など身近なテーマで徹底討論。④自習室には、毎晩10時まで灯りがともった。⑤事前研修以来の緊張から解放され、ひと息つく。⑥長春から北京に向かう夜行列車の車中。こうした経験が中国語の授業に生かされる。